

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2013年3月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目： 言語教育における「言語」，「国籍」，「血統」
ー在韓「在日コリアン」の日本語教師のライフストーリーを手がかりにー

申請者氏名：田中 里奈

主査	吉岡 英幸	(大学院日本語教育研究科教授)
副査	戸田 貴子	(大学院日本語教育研究科教授)
副査	川上 郁雄	(大学院日本語教育研究科教授)

本論文の目的、背景

ニューカマーによる日本滞在の長期化や定着に伴い、「日本語」を「母語」として身につけていく「非日本人」の増加が顕著になっている。そして、これまで「日本語は日本人のものである」とする「日本語＝日本人」という図式の再考と解体の必要が叫ばれてきたにもかかわらず、「単一民族神話」(小熊 1995)は依然として根強く維持されている。日本語教育学研究は、「日本語」によって「日本人化」を図ろうとした過去をもち、「日本語」を教えるという行為から逃れられないという領域だからこそ、この研究が必要であるとしている。

本論文は、“「母語」として身につけた「言語」と、そこから想定されうる“「国籍」/「血統」との間にズレをもつ「在日コリアン」教師の日本語教育における位置取に関する語りから、彼らのおかれている状況を逆に照らしだすことを通じて、言語教育における「言語」、「国籍」、「血統」の関係性がどのようなものであるかを描き出そうとしたものである。

本論文の内容と考察

申請者は、研究方法として、研究蓄積が少なく、公式統計では把握しにくい対象者、明らかにされていない社会的現実を照射するのに有効であるライフストーリー法が、「在日コリアン」教師を対象にした調査に適した手法であると判断して、これを採用した。また、インタビューという行為を「インタビュアーと回答者が共同で意味を作り出すもの」として位置づけ、研究の透明性・妥当性を担保するため、インタビューの相互行為と調査課程を開示する方法をとっている。ライフストーリーの記述については、研究協力者をただ客観的に記述するのではなく、研究協力者との様々なせめぎあいなど、それを「調査する自分」の経験にまで広げるという方針をとった。具体的なインタビュー調査は、韓国において2009年9月～2011年10月にかけて行ったものである。約1週間の集中的な調査を8回実施し、「在日コリアン」2世の教師7名、3世の教師11名から、一人につき1～4回、各1.5時間～5時間程度語りを聞き取った。

18人の調査対象者のうち教師V、L、E、Dの4名のライフストーリーを事例として提示し、申請者の解釈を記述している。4名のライフストーリーは、「帰韓」や日本語教師になるまでの経緯、日本語教師としての働き方、日本語や日本語を教えることに対する意味づけ、日本語教育に携わる際の名前の使用やそれに対する考え方などの点で、それぞれ大きく異なっていた。しかし、「在日コリアン」というカテゴリーの明示化や通称名使用という「戦略」を用いることにより「日本語のネイティブ」としての位置を確保しようとしてきた点は共通していた。名前には、「自分が自分であって他の誰でもない」ことを示す一方、「自分がどこに帰属しているのか」を示してしま

うという性質があるが、この名前の性質を利用して行われる、本名か通称名かという名前の選択行為は、「いかに自分を知らせるか」という自身の情報管理でもある。教師たちの事例が意味しているのは「カテゴリー」や名前を操作的に「戦略」的に用いることで、「日本人」により近いことを示したり、「日本人」らしさを「演出」したりすることが可能になっていることを示している。このことは同時に、「日本語のネイティブ」教師として、より価値づけられる現実があるということである。これは「日本人の日本語」が「正統な日本語」として意識される前提が共有されていることを示しており、「日本人性」が付与された「日本語」が依然として重視されている現実があるということを明らかにしたのである。

従来の研究では、「日本語＝日本人」という図式の問題は、「正しさ」という観点から「日本語」を評価し、「正しくない日本語」を排除してしまうことや、そうした考え方が取り上げられてきたが、本論文では、その観点に加えて「誰がその日本語を話しているのか」といった話者の所属が「日本語」の評価に大きく関係しているということを明らかにしている。いわゆる「正しい日本語」を話す「日本語の NS」であっても、「日本人でないこと」によって、正統な「日本語の NS」として見なされない現実があることが明らかになった。このことは、より正統な「日本語の NS」として「日本人」が評価されうるという「日本語の NS」内部のヒエラルキーと「日本性」が付与された「日本語」の存在を意味しており、「日本語」の評価に話者の所属が大きく関わっていることを示している。一方で、3名の教師は通称名を使い、「正統な日本語 NS」となることにより苦悩や困難を回避した例から、「日本語の NS」という概念が「着せ替え」可能な実体のないものであることを論じている。

「在日コリアン」教師は、混沌とした雑種な属性を持つが、それをありのままに見せることで日本語教育のポジションが脅かされるという経験を有しており、「日本語の NS」なら「日本人」、「日本語の NNS」なら「非日本人」という図式に収めようとする「単一性志向」の強制力の問題と常に隣り合わせの状況におかれていた。これを打破するには、「雑種」な属性に注目するだけでなく、それにより生じる困難や葛藤を可視化させること、その困難や葛藤をもたらす構造の矛盾を明らかにすることに意味があるとことを申請者は主張する。

本論文の意義として、言語学的な「正しさ」という形式の問題をあえて脇におき、「日本語」に付与された「日本人性」の問題に焦点をあてた点であること。そのため必要なことは、「日本語」という「言語」の評価において、「日本人であること」がどのような社会的、文化的優位性を内包しているかを常に問い続けていく姿勢が重要であるとする。また、二つ目は、従来両者の間にある言語能力を基準とした二項対立的な関係やそれぞれの内部にある同質性・

均質性の前提が批判されてきた「ネイティブ」と「ノンネイティブ」であるが、二項対立の関係性の中には容易に位置づけられない「在日コリアン」教師のライフストーリーの考察を通じて、「ネイティブ」と「ノンネイティブ」概念の脱構築を目指したこと。三つ目は、これまでほとんど行われておらず不可視化されてきた「帰韓」した「在日コリアン」教師に関する研究に焦点を当てたことであるとしている。

最後にドイツ語教育や英語教育などに見られる例を参照し、言語教育における「単一性志向」は韓国の日本語教育に特有の問題とは言い切れないことを指摘し、今後この問題と対峙していくためにヨーロッパ社会統合を背景に構想された複言語主義の考え方が、「単一性志向」を打開する糸口となる可能性を示唆する。そして、ある「国籍」や「血統」をもつ者に、ある「言語」の「正統性」や「真正性」を付与してしまうという言語教育における「単一性志向」の問題を徹底的に可視化させること、そして、それを通じて批判のうねりをつくりだしていくことが必要だと断じている。

本論文の評価

本論文の評価できる点は以下のとおりである。

これまで日本語教育では先行研究のほとんど見られない「帰韓」した「在日コリアン」日本語教師を研究対象として、その言語意識や教育経験などの実態に焦点を当てたこと。そして、彼らへのインタビュー調査によるライフストーリー研究を行い、彼らの実践の中に見られるアイデンティティのあり様を、「言語」「国籍」「血統」の関係性から明らかにしようとしたこと。そのことにより、日本語教育におけるポストコロニアル的状況の今日的な問題性を浮き彫りにし、その問題の意味と重要性を明示したこと。さらに、日本語教育学的研究を行う研究者の立場の政治性とその暴力性について、自らの内省も含めてえぐりだしたことが、本論文の特長でありオリジナリティとなっていて、評価できる点である。

ただし、以下のような課題があることを指摘しておく。

「言語」「国籍」「血統」の関係性に関する議論で、申請者が特に「言語」についてどのように定義するかが不明確である。たとえば、「言語学的には「日本語のネイティブ）」という表現は本論文の主張と合致するのか。また、「言語教育」は個人の中に「言語」の複数化を促すことを主張する場合の「言語」はどのように捉えられているのか。このことは、言語教育における「単一性志向」の問題性を徹底的に可視化させることが重要だという主張においても、可視化する場合の「言語」の捉え方について述べる必要があろう。また、本論文の成果が日本語

教育の現場に立つ教師にとってどのような意味をもつのか、抽象的な議論ではなく、具体的に論じられることを期待したい。そのためにも、教師Dに通称名の使用を命じた学校の責任者や学習者などにもインタビューを行うなどして、韓国社会側の実態を掘り下げて把握することも必要になると思われる。

以上のような課題はあるものの、本論文は優れた学術研究として高く評価することができる。よって、本論文は日本語教育学の博士学位論文に値するものと認められる。